Report

オリンピックと女性②

オリンピック評論家　伊藤　公

一九〇〇年の第二回大会から女子選手の参加が認められましたが、その数わずかに十二人。それから九十年余り、女子選手の割合はようやく三五％です。

狭き門反発女子大会を四回開く

一九〇〇年の第二回パリ大会で、女子選手の参加が認められたものの、その数はわずかに十二人。以後、一九〇四年のセントルイス大会は五百五十四人中八人、一九〇八年のロンドン大会は二千三十四人中四十三人、一九一二年のストックホルム大会は二千五百四人中五十五人、二〇年の第七回アントワープ大会は二千五百九十一人中七十六人と、女子選手の数は少ない。

二四年の第八回パリ大会では選手数は三千七十五人を数えた。そのうち女子選手は百三十六人となり、やっと百人を上回ったが、全選手数の四・四％にすぎなかった。

このような国際オリンピック委員会（IOC）の女性スポーツに対する消極的な態度に憤慨したフランスのミリア・アリス夫人は、国際女子スポーツ連盟を設立し、二二年にパリで「第一回女子オリンピック大会」を開催した。この大会は陸上競技だけだったが、IOCは勝手に〝オリンピック〟という名称を使用したことに態度を硬化させ、IOCと国際女子スポーツ連盟は対立した。そのためか国際女子スポーツ連盟は、二六年の第二回大会からは名称を「国際女子競技大会」と変更し、三四年の第四回大会まで続けた。

日本の人見絹枝選手は、二六年にエーテボリ（スウェーデン）で開催された第二回大会、三〇年にプラハ（チェコスロバキア）での第三回大会に参加し、金三、銀一、銅四個のメダルを獲得している。陸上八百㍍で二位になり、日本人女性として初めての五輪メダリストとなったのは、その間の二八年に開かれた第九回アムステルダム大会だ。

水泳の女子種目は、ストックホルム大会から五輪に導入されている。しかし、もっともポピュラーなはずの陸上競技で、十六年後のアムステルダム大会まで女子種目が実施されなかったのは、今から思うと不思議なことだ。

アムステルダム大会の陸上競技に参加した女子選手は、百㍍、八百㍍、四百㍍リレー、走り高飛び、円盤投げの五種目で、世界一を競い合った。

ロス大会で参加率二四％に

第二次世界大戦後初の五輪は、一九四八年にロンドンで開催された。この大会には五十八カ国から四千六十二人の選手が参加しているが、女子選手は三百八十五人だけ。全選手数に占める女子選手の割合は九・四％である。ロンドン大会では十九競技百四十九種目が実施され、女子選手はそのうち陸上、水泳、フェンシング、体操、カヌーの五競技十九種目に参加している。種目数の割合は一二・七％ということになる。六四年の東京大会は、女子体操や新種目となった女子バレーボールの話題が華やかだったために、かなり多くの女子選手が参加したような錯覚に陥りがちだが、実際には五千五百八十六人のうちの六百八十三人。全選手に占める女子選手の割合は一二・二％にすぎない。しかし、全種目への割合は、ようやく二〇％を超す。

女子選手が千人の大台に乗るのは、七二年のミュンヘン大会だ。全参加選手数は七千八百九十四人で、その中で女子選手数は一六・四％にあたる千二百九十九人にまで急増する。そのあとはボイコット問題などのために、参加選手数も少なくなり、そのあおりで女子選手の伸びも見られない。

飛躍的に多くなるのは、八四年のロサンゼルス大会である。ロサンゼルス大会は、ソ連や東欧諸国がボイコットしたために、参加国数、参加選手数の激減が心配されたが、参加国数ではミュンヘン大会の百二十二カ国を上回って百四十カ国となり、参加選手数はミュンヘン大会を下回ったものの七千五十五人、そのうち女子選手は千六百八十六人を数えた。女子選手は一気に二三・八％となったのである。

八八年のソウル大会では、これが三四・六％にまで伸びている。今夏のバルセロナ大会の公式データはまだまとまっていないので、全選手数に占める女子の割合はここでは出せないが、ソウル大会のそれと大同小異のように思われる。

全般的に参加選手数は制限されており、女子選手についても例外ではないが、女子選手数に限っていえば、ようやく〝女性の時代〟が到来しつつあるようだ。

〈つづく〉

（信濃毎日新聞より転載）